



No.500

一般社団法人名古屋工業会会誌

ごきそ

2021 3-4 月号

発行 一般社団法人名古屋工業会
(名古屋工業大学全学同窓会)

〒466-0061 名古屋市昭和区御器所町字木市29番
国立大学法人名古屋工業大学 校友会館内

TEL・052-731-0780

FAX・052-732-5298

E-MAIL・gokiso@lime.ocn.ne.jp

<http://www.nagoya-kogyokai.jp/>

【ごきそ500号記念】

「ごきそ」500号にあたって
新春対談 2021
500号記念寄稿

【新聞記事コーナー】

中日新聞

【研究者紹介】

微生物由来の新規酵素型ロドプシンの
機能解析と光遺伝学への応用
手のひらサイズの超小型イオン銃が拓く新治療

【ホットライン】

2020年度 第3回運営委員会開催



一般社団法人 名古屋工業会

2021年度 定期総会及び会員総会のご案内

現時点では下記のとおりですが、新型コロナウイルス対応により、実施方法、日程、会場等の変更が生ずる可能性がありますので、名古屋工業会ホームページの「新着情報」で、ご確認ください。（URL: <https://www.nagoya-kogyokai.jp/>）

記

と き 2021年5月29日（土）
と こ ろ 名古屋工業大学内予定
〒466-8555 愛知県名古屋市昭和区御器所町 TEL 052(735)5000
定期総会 12:30～14:00 名古屋工業大学 NITech Hall
(定期総会は代議員のみの総会です。)

会員総会 14:00～14:30 名古屋工業大学 NITech Hall
特別講演 14:30～15:45 ” NITech Hall

(会場については、感染状況により、学外（名古屋市公会堂など）に変更することがあります。ホームページでご確認ください。)

〔定期総会〕

- 第1号議案 2020年度事業報告及び収支決算報告
- 第2号議案 2021年度事業計画及び収支予算案
- 第3号議案 代議員の選任
- 第4号議案 役員の選任
- 第5号議案 その他

〔会員総会〕

- (1) 定期総会（代議員のみの総会）での決議事項報告
- (2) 行事
 - イ. 叙位叙勲等表彰者に記念品贈呈（会員に限る）
 - ロ. 卒業満70年（S26年卒）、60年（S36年卒）、50年（S46年卒）、40年（S56年卒）の正会員への顕彰
 - ハ. 特別講演 講師：ダイハツ工業株式会社 アドバイザー（元 代表取締役会長）伊奈 功一 氏（K46）
演題：「トヨタとダイハツで学んだこと」

※新型コロナウイルス感染拡大防止のため懇親会は実施しません。

お申込み（支部長、代議員の方には、別途ご案内しますので、申し込み不要です。）
電子メールで①お名前、②ID番号③卒業学科と年度、④ご住所、⑤電話・FAX
⑥電子メールアドレス なお、4月16日（金）日必着でお願いします。
申し込み先メールアドレス：soukai@nagoya-kogyokai.sakura.ne.jp

表紙写真説明

「桜咲く 母校名古屋工業大学2号館」

撮影者 名工大企画広報室



「ごきそ」500号にあたって

(一社)名古屋工業会 理事長 加川 純一 (K49)

「ごきそ」500号の発行にあたって工業会の歴史を簡単に振り返ってみます。名古屋工業大学の前身である名古屋高等工業学校は明治38年（1905年）に創設、昭和19年に名古屋工業専門学校に改称されました。一方昭和18年に創設された愛知県立工業学校は昭和19年愛知県立専門学校に改称、その後この2校が昭和24年（1949年）に名古屋工業大学として包括設置されました。

名古屋高等工業学校の設立9年後の大正3年（1914年）に同窓会が設立されており、大正10年（1921年）に「名古屋工業会」と改称し、6月に会報第1号が創刊されました。会報は、戦後の大学への昇格を経て、昭和42年3月第302号まで刊行されましたが、昭和42年4月の名古屋工業会の社団法人設立を機に同年6月から号数を改めて、会報1号が刊行されました。その後、昭和45年に「ごきそ」と改称し、今年3、4月号で500号に至ります。同窓会誌としては長い歴史があります。

最近では会員の皆さんには発行毎案内しておりますが、本文はホームページでの閲覧方式に変えさせていただきます。是非名古屋工業会ホームページにてご覧ください。

(<http://www.nagoya-kogyokai.jp/>)

昨年は新型コロナの影響で記事になる数々のイベントが中止になり編集委員の皆様は苦心されています。ただ工業会としては大きなイベントとして、昭和51年以来長く拠点としていました工業会館を耐震強度不足でやむなく解体することにしました。竜が池に映える工業会館は現在でも斬新なデザインで解体はしのびない限りです。現在の名古屋工業会事務所は工業会館設立以前に居ました校友会館（旧三協会館／昭和7年落成）に一昨年に移転しました。学内に移転することにより母校との風通しを良くし、また同窓の皆さんのご支援を受け母校を応援できるような体制固めを引き続き検討していきたいと思えます。

今号は、新春対談2021として配信しました木下学長と私の対談と、名古屋工業会館の解体をめぐって寄せられた原稿を特集させていただきました。

全学同窓会組織として同窓の親睦の場として長く活躍できますよう、そして会誌「ごきそ」も続けていけますように、今まで同様ご協力・ご支援をよろしくお願いいたします。



汽罐室の側壁



新春対談 2021

名古屋工業会 名古屋支部

本稿は、名古屋支部が制作し、2021年1月1日から1月31日まで配信した「木下隆利学長と加川純一理事長との新春対談2021」の録画をテープ起こししたものである。司会は仁科名古屋支部長が担当している。

仁科 みなさん、明けましておめでとうございます。名古屋支部支部長を仰せつかっております、経営工学50年卒の仁科と申します。

例年ですと名古屋支部を中心に岐阜・尾張・三重・三河・静岡、各支部のご協力を得て新年互例会を開催いたしておりましたが、今回は、新型コロナウイルスの影響で開催を断念せざるを得ません。互例会ではいつも学長と工業会理事長にご挨拶を頂戴しております。そこで今回は木下学長と加川理事長に新春対談ということで大いに語っていただこうと思います。私が司会を務めさせていただきます。では、これから新春対談を始めたいと思います。

一同 明けましておめでとうございます。

同世代の学生時代

仁科 本日はよろしくお願いいたします。

名古屋工業大学 木下隆利学長です。よろしくお願いいたします。

一般社団法人名古屋工業会 加川純一理事長です。よろしくお願いいたします。

木下学長は昭和50年、繊維高分子工学科を卒業されております。単科会でいうと双友会ですね。加川理事長は昭和49年、金属工学科を卒業され、名晶会ですね。

加川理事長が1年先輩で…

木下 同じですね。だからもう、ほとんどかたまってるといえるか、同世代ですね。

仁科 昨年度のホームカミングデーで、昭和44年卒の方が、半世紀遅れの卒業式ということで。我々の入学ちょっと前に東大紛争で東大入試がなくて（名工大でも）大学紛争もあったわけで、同世代ということを考えますと…大学紛争からちょっと経ってからでしょうか。共通の話題になりますとオイルショックじゃないかと思うんですね。オイルショックは就職にものすごく影響がありましたし、私も覚えているんですが、灯油を買いに行っても売ってくれないとか、銭湯がえらい高くなり男性からも洗髪料をとるとか、そういう時代だったわけです。オイルショックにまつわる何か思い出などはありますか？いい思い出ではないかもしれませんが（笑）。

木下 僕らが学部の時はずいぶん早く、4年卒の連中はわりかし従来通り大手に就職してたと思うんですけど、M2を卒業する時は大打撃で、惨憺たる就職状況だったように思います。

加川 僕も同じで、僕は昭和49年に院へ行きましたが、だから51年が就職の年になるのですが、ほとんどの会社が採用をしなくて、実は私は1年留年しました。就職浪人です。

木下 そうでしたか。



木下隆利 学長

加川 一応51年にほとんど修士論文はできあがっていましたが、それを提出せずに、とりあえず就職を前提に1年留年したんです。ただ、振り返ってみると、その1年は人生の中ですごく良かったというか、人生観を変えたと思っています。ひとつは、1年留年して就職した時に、仕事に飢えていたんです。1年ハンディキャップがあるので、その分頑張ろうと、会社に入った時にそう思って、しゃにむに仕事しました。それから、その1年間で、少しですけど海外を経験できたので、自分でここまで来たらどこへ行っても仕事できるんじゃないかな、とそういう人生観ができたんですよ。自分のなかでかなり気持ちが変わったと思いますね。

木下 分かります。ある意味どん底なんですよ。どん底を感じたんですよね。

仁科 我々の年は、就職した人のほとんどが自宅待機だったんですよね。

木下 就職したとしてもね。

新型コロナウイルス対応について

仁科 給料はもらえるんですけど、出社しないでいいという。それが我々共通の世代の話ですね。一方今はというと、新型コロナウイルスで、大学の対応も大変だと思います。遠隔授業を中心ということにならざるを得ないと思いますが、その辺りはいかがでしょうか。

木下 昨年の5月14日に（遠隔授業を）スタートすることができました。

仁科 学生の評判はいかがですか？

木下 オンデマンド授業が落ち着いた8月に、学生全員にアンケートをとりましたら、8割以上が満足しているというんです。繰り返し聴ける、好きな時間帯に聞ける、それから質問がしやすくなったということで、理解力とか判断力といったものが非常に鍛えられた気がするという、前向きな回答が多かったんです。ただ、反面、孤独感を感じるとか寂しいという意見もあって、満足が8割以上、孤独感が7割以上だったんですよ。満足してるけど寂しいという二つのマ

インドを共有している学生がほとんどでした。

仁科 新入生なんかは特にそうですね。

木下 特にそうですね。だからリスクはありましたが、実験とか実習とかは少人数で対面でやっていました。また保護者の皆様からでもできれば対面を一部再開して欲しいという声も直接届きまして、今は一部対面でやっています。ですから、平均すると週二日は登校しているんじゃないかと思います。

仁科 授業自体もそうですが、行事、例えばホームカミングデーもそうですが今年度は中止せざるをえなくて、トップセミナーもそうですね。それから工大祭はWeb開催でしたね。また学生の中でも下宿やアルバイトなんかをしている学生は特に大変だということで、工業会からも寄付金でずいぶん支援させていただきました。工業会からは本部と支部をあわせて416万円。それからOBの方227人で456万円、

木下 400を超える個人と団体から2,000万円をこえる寄付金がありまして、下宿生でバイトが出来なくなったという学生に手を挙げて頂いて、一人5万円の支援金をすでに配分させていただきました。

仁科 工業会の方も、コロナ禍で、まず総会が書面審議でしたね。

加川 総会は書面審議にさせていただきました。支部長会議をいつも7月にやっていますが、全国各地から集まり、皆が集まって感染のもとになると困るので中止しました。ただ工業会の



加川純一 理事長

中でも常に色々と議論はしていてそれを支部の方も共有していただきたいということで、例年ホームカミングデーの時に開催している支部連絡会を、昨年の11月にオンラインで支部長さんと会議をやりました。全国22支部の内、3支部は参加できませんでしたが、それ以外は皆さん参加いただいて、顔を見ながら実施できました。なかにはリモートで会議をやるのははじめての方もおみえでした。例えば北海道の支部長からは「道内は非常に広くて一堂に集まるのはなかなか難しいので、正常になってもこういうやり方はありかも」と言って頂けたりして、良い経験になったと思っています。

女子学生の増加について

仁科 それから、我々の世代からすると、今の名工大の一番変わったところというのは、やはり女子大生の増加だと思います。今年は17%だとか。

木下 19%ですかね…20%に迫ってきました。

仁科 就職を考えると、リケジョ…、そういえばこのまえ建築の光鯨会のOBの方にリケジョという言葉を使ったら、「建築ではリケジョとは呼ばない。建築小町と呼ぶんだ」と言われました。

木下 なるほど（笑）

仁科 女子大生は、就職というのはすごく良いのではないかと思います。

木下 名工大は全体でも就職率98%とかですごく良いんですけど、さらに女子学生は5年連続

で100%なんですよ。

仁科 （女性の卒業生の）同窓会として、鶴桜会が2016年にできたとお聞きしていますが、工業会としてもずいぶん支援していると思います。その辺りはいかがですか。

加川 2016年に藤岡先生と武藤先生で立ち上げられたと記憶しています。いつもはホームカミングデーの時に総会をおやりになっています。これから会員を増やしていくことを考えると、ひとつてなのか、あるいは組織、職域で拡げるのか。今後、鶴桜会を工業会の会友とすることを我々も考えていますが、工業会としても何とか女子の卒業生を紹介してあげることができればと思っています。今は20%とのことですが、我々のころは1学年に1人か2人でしたからね（笑）。私は数年前から卒業式に出席させてもらっていますが、名工大の卒業式に袴姿の女性が増え華やかになったなあという印象を受けてますね。

仁科 先ほど理事長が会友という制度をおっしゃいましたが、いわゆる単科会というのがある中で、鶴桜会は単科会をまたいだ組織になっています。これについては後でまた話をお聞きしようと思いますが、工業会自体の組織の在り方をどう考えていくか、という点はあると思うんです。

名工大の教育改革について

次に、名工大の教育改革について伺います。新設の創造工学教育課程が、いま学年進行でマスターの1年ですかね。

木下 そうですね、1期生が来年の3月修了ですね。

仁科 これが一番の教育改革の柱だと思いますが、この設立の経緯や目的をお聞かせいただけますか。

木下 そうですね。まず、産業界がどういう人材を求めているのかということを聞いてみると、おっしゃることが共通してしまっていて、びっくりしました。価値を生み出す、ゼロからイチ



（司会）仁科 健 名古屋支部支部長

を生み出す人材。例えば、これまでは現存の製品を小型化するとか軽量化するとか、いわゆる改良でつくったものが世界中で売れたわけですが、今は、これまでなかったものを生み出してくれということがいわれます。我々年寄りは改良型の人間だから、ゼロからイチを生み出すのは若いお前らがやれと（笑）。イノベーションはブラックボックスとの格闘だと思うんですが。そこで、8割は挫折するわけですよ。やめたり、部署変えたり。去っていく。新しい価値を生み出せる人、挫折に耐えうる人、それから異なる部署をつなげる人、自分の素質に自ら気付ける人。これが、色んな企業から共通して出てきた要望だったんですよ。

仁科 産業界の立場で、新入社員に対してどんなことを求めるんでしょうか。

加川 いま学長がおっしゃったように、一つは専門性・知識が高い人を欲するというのはあると思います。ただ、今世の中が変わろうとしていて、それぞれの企業の中で、経営者はおそらく手詰まり感があると思いますよ。世の中は急激に変わっていくのに何も出てこない。よく若い人にも言うんですが、とにかく何事にも興味を持ちなさいと。興味を持ったことを自分で学ぶ、新しい知識を得る、そうしないと自分が陳腐化しちゃうので、それが大事だと言ってきました。そのベースになるのが、色んな知識を持っていることだと思います。そして自分で学ぶ方法を知っている人が、産業界としては欲しい人材だと思います。この地域で言うと、今、EVが出てくると内燃機関の部品を生業にしている会社はたくさんありますが、そういう企業がどのように変わっていくのか。全く新しいことをするのか、あるいは車ということのなかで何かをやっていくのか、これって、会社組織の中で上から下まで、会社の存続にかかわる重要な懸案事項だと思います。そういうプレッシャーに屈せず、やれる人が欲しいと思います

木下 創造工学は1年生の時に、6年後にこういうことを達成するという目的を立てさせます。こういうロボット作りたいとか、こういう

センサを作りたいとか。それを達成するために電気も情報も化学もあるいはデザインも知らなくちゃいけない。ということで研究室ローテーションといって、関連するいろんな分野の研究室に入って学んで、知識を得て、目的達成に向けて組み立てていくんです。進めば進むほど、目的に近づけば近づくほど、達成のためにあれも必要だなとか、これも必要だなとか、新たな悩みがどんどん出てきて困っています、と外部評価委員会で学生が言うんです。それを外部評価委員がすごく高く評価するんです。「うちの会社の若手が悩んでることと同じことを、大学の中で体験している」と。本当に素晴らしい教育課程だと。そういった高い評価を頂いています。

海外インターンシップについて

仁科 色んな体験ということだと、グローバルインターンシップ。これは創造工学に限らず今さかんに学生が海外に行っていると思いますが。工業会としても色々と支援していると思いますが、その辺りを理事長からご説明いただけますか。

加川 （先ほども言いましたように）私は院生のときたまたまわずかですが海外を体験することができました。その当時インターンシップはありませんでした。イギリスに行ったんですけど、イギリスの人たちってこういう考えするんだとか、色んな日本との違いに触れることができ、いい経験をしました。それから会社に入ってから、30代後半から世界中のほとんどの自動車メーカーを訪問しました。そうすると、その国の人の考え方、例えば僕はエンジンの部品の開発をやったんですが、エンジンの開発目標が国によって違うんですよ。日本のターゲット、アメリカ、ヨーロッパのターゲットが。端的に言うと、ヨーロッパはアウトバーンで200キロ以上出せるエンジンをつくるわけですが、日本ではとにかく燃費のいいものをつくりたい、アメリカだとトルクがあって大きいものを引っ張れればよいと。それはおそらくその国の文化が違うからで、そういうことに人生の早い段階で

いろいろな国の文化に触れるのはきっと会社に入ってから役にも立つと思います。工業会としては予算に限りはありますが、できるだけその支援をさせていただきたいと思っています。

木下 3ヶ月はむこうでやりますので、2～3週間だと旅行になっちゃいますが、3ヶ月だと生活になるんです。そうすると生活の中での色々な挫折。スーパー行ってレジのおばちゃんが言葉も通じない、それが怖くてかなわんなあ、とか（笑）。そういう何気ないけど大変な経験が大切ですね。困ったとき俺ってこういう気持ちになる人間なんだ、ということを知るのがとても大事なんですよ。

仁科 コロナが収まれば、ぜひともまた実現して欲しいですし、工業会としても支援していきたいと思っています。

産業界との連携について

続きまして、名工大の一つのウリだと思えますが、産業界との共同研究についてお聞きしたいと思っています。

木下 これまでは一人の先生が企業と共同研究をするのが基本でしたが、今は、組織対組織の共同研究、チーム制になりましたね。色々な分野の先生たちがチームを組んで、企業の課題に取り組んだり、新しいものをプロデュースしたりすることで、少しずつ大型化していています。

仁科 加川理事長の日特さんも、名工大と大がかりな連携していましたね。

木下 ありがとうございます。

加川 名工大との産学共同プロジェクト推進は森村グループの日本ガイシですが、私もたまたま会社にいた最後の2年間研究所の担当役員をやっていたので、大学との協業の経験もあります。その時に皆に言っていたのが、大学との研究、NEDOとの研究など色々あるが、それはそれとして、大学へどういうお願いをするのか。一つの例は、会社で電池の開発を始めたんですが、全くの素人で、測定の方法が分からず。そ

れを大学に、測定方法を教授していただいた。一方では、大型化の話がありましたが、それに参画することも大事ですが、どこもやっていないような研究、そういうものがいつ化けるか分からない。そういう研究の方が当たった時の付加価値や見返りが大きい。だから例えば全体で10テーマぐらい支援するなら、2テーマぐらいはそういうものを入れて支援先を考えたらどうかとよく言っていました。だから、大きいプロジェクトに参画したこともあるし、色々な分野の人と組んでやるやり方もあるし、あるいは個々の研究室へ聞きに行くとか。色々なやり方がある中で、何か新しいものをつくりたいよね、という気持ちを持って仕事をやってください、と言っていました。

木下 産官学の後に金がつくんですよ。ここがすごく大きくて。色々な銀行さん、地銀も含めて、多くの顧客企業ありますよね。そこを紹介して頂いたり。それで数が増えて、今は教員ひとりあたり1件以上の共同研究ということになってきて、数も金額も上がってきています。

仁科 清水初代学長が、活きた教育、活きた研究を、と仰っていましたが、まさに名工大のDNAだと思います。

木下 脈々と受け継がせていただいています。あとは、もうひとつ、改革で大きく変わったのは、教育で大学目線から企業の要望という話もしましたが、研究面でも共同研究と言いながら研究者目線が多いんですよ。そここのところも、もっと、いうならば社会目線ですよ。消費者がどんなものを求めているのかを意識した基礎研究が世の中に出たときに、こういう形で役に立った、とか。研究者目線、技術者目線でやると何が起きるかという技術の高度化にOrientするんです。機能を極限までもっていくとかね。それが果たして日常的に使う上で、そんな高機能・高性能が要りますか？っていうところまできてるんですよ。

仁科 私の専門は品質管理なんですけれども、高品質という言葉もあるんですが、もちろんそれはそれで追求すべきですが、今はやはり市場

では安心・安全ということが求められていて、いかに寿命が長いものがあったとしても最後壊れるときに火を噴いたら絶対にダメですから。市場の価値観は変わってきていて、工学というのは社会を見ながら進めていかなきゃいけないと思いますね。

名古屋工業会のこれからについて

続きまして、加川理事長に名古屋工業会のこれからについてお聞きしたいと思います。

加川 ちょうど一昨年の11月でしょうか、事務局を（学内の）校友会館の方に移転させて頂いて。今は工業会館を解体しています。耐震の関係で進めたのですが、学内に移ったことで、同じフロアの卒業生連携室あるいは大学と、できるだけコラボレーションしたい、とにかく全学同窓会というのを念頭に置いて活動したいと思います。工業会としては卒業生の2割が会員ですが、残りの8割は非会員です。ただ卒業生には変わりありませんし、全国の支部へ行くと非会員の方も総会というか地域での集まりには参加されています。ということは、8割の非会員の方も何かしら母校のことを感じて暮らしていると思うのです。非会員の方にも積極的に工業会の活動に参加していただけるようになれば、みなさんにとって人生の楽しみが広がるのではないかと考えています（もちろん会員になっていただきたいのですが）。単科会や、部活のOB会が卒業生の組織としては結束が強い、それと職域のみなさん。現役の職域のときはみなさん会社のメールなどで連絡はつくのですが、退職されるとなかなか連絡がつかない。これをどうするか、今考えています。これからの工業会の活動の中で、今までは各支部での行事をやる会員の方には我々から補助金を出します。非会員の方は出していませんでしたが、今回わずかですが思い切って出そうと。できるだけ参加しやすい環境をつくって、工業会であり同窓会、OB会として、輪を広げていって、最終的には母校が頑張っていたくために応援しようよ、という形をとっていきたいと思っています。

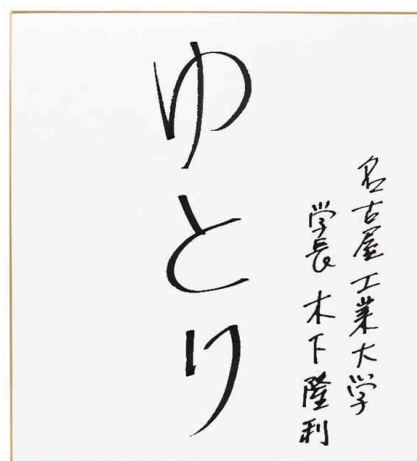
仁科 会友という制度をこれから利用して、先

ほどの鶴桜会もそうですが、ちょっとした大きな部活のOB会のようなものも、どんどん工業会の方で一緒になってやっていく、という方向でしょうか。

木下 それはいいですね。共同研究がこれだけ活性化されてきたとか、就職率が100%近いとか、っていう話をさせて頂きましたが、結局、OBの方の直接支援、側面支援、間接支援なんですよ。OBの皆さんがもっともっと一体化して頂けると、大学としても非常に心強いです。なので、この新春からそういったスタートを切っていただけると本当にありがたいです。

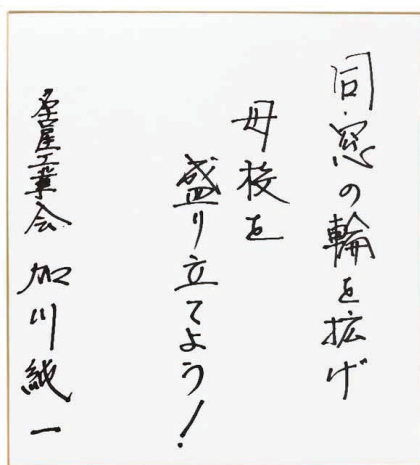
最後に一言

仁科 ありがとうございます。最後に、色紙を準備しましたので、今年の抱負を書いていたいて、一言ご説明いただけたらと思います。



木下 私は「ゆとり」と書かせていただきました。工学というのはサイエンスと社会をつなぐというインターフェースの大きなミッションがあります。サイエンスを深く理解し、なるほどねっという研究者としての理解を深めることもさることながら、社会の皆さんが何を求めているのかということもキャッチアップして基礎研究していかなければならないというお話をしてきました。そうして、新しい価値や新しい幸を提供していくべきだと思うんです。その幸福感に直結するのが、僕はゆとりだと思うんです。給料日前になんかうキウキするなっていうのは経済的ゆとり。連休前になんか楽しいのは時間的ゆとりなんですね。ゆとり教育という言葉が

あって、ゆとりが毛嫌いされているのが非常にまずいんです。あれは教育を直接ゆとりにかぶせたからそうなったんですが。やはり、教育をして育てた結果、その人が社会にゆとりをプロデュースできるような人材になっていく、というのが本来のゆとり教育だと思っているんですよ。これから先、リベラルアーツ系を強化しようとしていて、芸術や文化、こういったものに学生や先生も親しんで、そんな中で、カルチャーやアートをバックグラウンドに研究を進めていければ、ゆとりをプロデュースできるようになるんじゃないか。そんな願いを込めて、ゆとりとさせていただきます。



加川 私はさっきから話している通りですが(笑)。(同窓の輪を拓げ、母校を盛り上げよう!)やはり卒業すると大学に無関心というのは、私もそうでした。OBには多少生活にゆとりが

ある人が結構おみえになると思います。そういう人に、自分の母校に振り向いてもらう機会を、我々としてはつくりたい。そのためには今の会員以外にも、OBをできるだけ多く集めて、土台をつくって、母校を応援しようと声掛けをしていく。それが同窓会としてできる一番のことじゃないかなと思います。もちろん現役の人たちは、自分の大学の、あの先生と話したら、一緒に研究をして何か新しい知見をもらえるということは常に考えてると思います。ですから、OBの方が、しがらみ一切なしとにかく応援しようと。何%かはそういう方がお見えになるんじゃないかと思って、できるだけ今の同窓会の輪を拓げていきたいなと思っています

仁科 そうですね、それで母校を支援していきたいですね。どうもありがとうございました。

今日、(お正月ということで)きれいな花を準備したんですが、こんなことを聞いたことがあります。1日楽しむ人は花を生けなさい、1年先を楽しみたい人は花を植えなさい、10年先を楽しみたい人は木を植えなさいと、100年先を楽しみたい人は人を育てなさいと。

木下 なるほど。

仁科 やはり大学の人材育成というのは一番の使命ですし、それを我々同窓会・工業会としては支援していきたいと思っています。

今日はどうもありがとうございました。



対談風景 (名工大2号館11階ラウンジにて)

500号記念寄稿

同窓会のシンボル名古屋工業会館44年間の歴史

(一社)名古屋工業会 常務理事 内藤 克己 (A43)



○自己紹介

現在常務理事をさせて頂いているA43内藤克己です。建築学科卒の常務理事はT15染木正夫氏以来約半世紀ぶりの担当です。此のことは、名古屋工業会館の建設を染木先輩が担当し、その解体を内藤が担当させていただくのも運命的・奇遇さを感じます。

私は、学部卒業後、清水建設で42年間、設計から現業そして都市開発を担当してきましたので、今回の工業会館耐震化、および活用プロジェクトは工業会の将来に資するテーマであり、私の経験と会員の意向、建築学科の先生方のご意見も踏まえ、又、建築学科の先生方の知恵もお借りし、工業会にとって最善はどうあるべきかを考え検討してきました。

ごきそ500号の特集「名古屋工業会館」に当たって工業会館の耐震化及び資産活用の視点から担当者として検討してきた経緯を記録として報告させていただきます。

○工業会館の歴史

- ・S44年・45年に集会場設置案の会員意向アンケートが行われ、S46年には名工大創立70周年・工業会設立60周年記念事業として、名古屋工業会館建設が位置づけられ、具体的検討が始まりました。

建設に向け会館建設委員会が設置され、土地の確保、会館の計画及び資金の調達（会員の寄付）の検討が始まり、建設計画を名古屋地区の5大学建築学科の会員グループに構想案を依頼し、5計画案が出され、比較検討され最終案が決定されました。（図1）

そして、建設資金調達を全会員や関係企業の寄付をお願いし（結果約1億34百万円）、土地の取得と

建設費にあて、設計を会館建設委員会（代表中島一S22他3名）に、施工を鴻池組に依頼し、S50年着工、S51年に竣工しました。

- ・施設は工業会のシンボルにふさわしい現代的デザインの外装れんがタイル張り、RC造4階建て塔屋1階で延べ面積665.09㎡で、1階は駐車場、2階が本部事務局とサロン（当初は喫茶室で改修後本部会議室）3階は小会議室、4階が大会議室で同窓会本部及び名古屋支部はじめ各支部や単科会の会合等で利用してきました。又、工業会の安定的事業収益を図るため、近隣への月極め駐車場及びテナント入居者を募集し4テナント利用を推進し、その後、経年劣化による仕上げや、設備のリニューアルと会館の活性化検討会を実施しています。

そして、大学改革・学科再編成等により、同窓会の編成や単科会活動の仕方等検討されてきました。

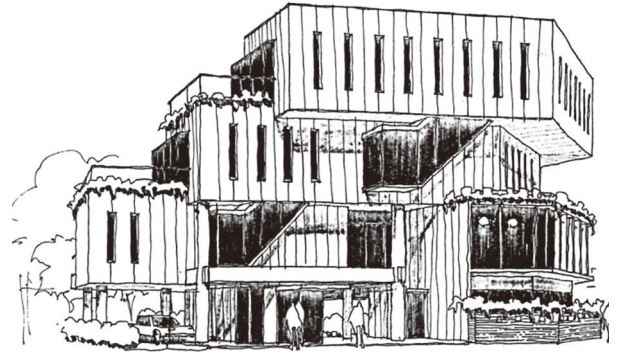


図1. 竜ヶ池側より見たる名古屋工業会館

○今回の建て替え検討から解体への経緯

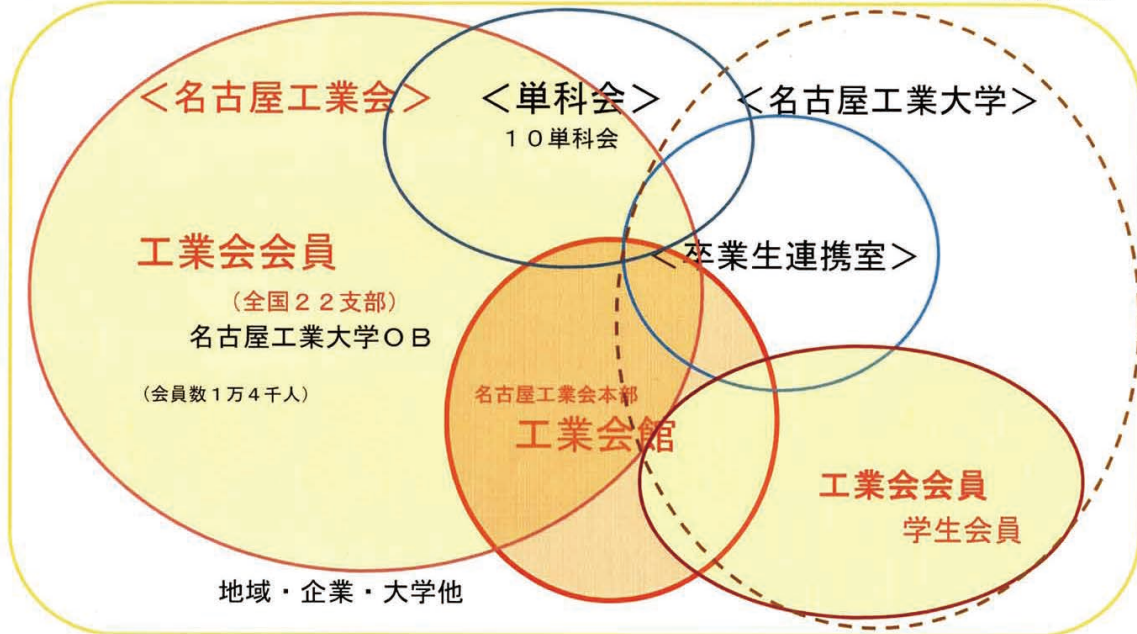
- ・H7年の阪神大震災後、耐震改修促進法（S56年以前の建物の耐震化）が制定され、それに基づき、大学本体の耐震診断や耐震改修が推進され大学の全建物が（H14年～H26年）10年余りの時間をかけ建て替えや耐震改修工事が実施されてきました。
- ・我が工業会館も旧耐震の建物であり、H20年に建設した鴻池組に耐震診断を依頼し実施、その結果、H21年に耐震指標のIS値が1階から4階のX方向が0.32～0.6、Y方向が0.28～0.66で、ともに1階が0.28～0.32で耐震補強が必要との判定でした。
- ・H23年3月に東日本大震災が発生約2万人の方が死不明となり、その後として南海トラフ巨大地震の発生確率が高くなっており対策が必要との認識が高まってきました。
- ・耐震強度不足の工業会館をどうするか、いろんな検討がされたが、その中のダイナミックな検討は工業会館を大学に寄付し、当時の講堂と三共会館を含めた大規模な工業会も含めた新大学会館を大学敷地の西側敷地内に建設する構想の協議もあったようですが、大学との合意形成が出来ず実現しませんでした。
- ・H27年頃からは、同窓会の資産を含めた、長期財政の見通しや、組織の在り方等、他大学の同窓会運営についても情報収集し見直しを始めました。又、工業会館の耐震化の方針検討の為、開発方法による費用の押さえを行い(解体1.5～2千万円、建替え1.8億円、耐震補強7千万)検討のベースとしました。
- ・H28年には耐震改修促進法改定、耐震診断義務化され、耐震改修の社会的認識が高まってきたことも背景として、工業会館の耐震改修方法の具体的検討に取り組みました。
- ・具体的に検討を進めるために、長期財政検討委員会と建物委員会を設置し、検討スケジュールを作成し、組織的オーソライズを念頭に計画的に検討を進めました。
- ・長期財政の見直しから、大学支援、会員サービス、本部運営管理のバランスと基本資産の在り方を踏まえ、本部管理費の圧縮、工業会館耐震化の方法検討に取り組みました。
- ・H29年度耐震化方法の検討と同時に、工業会本部としての施設の在り方を大学建築学科のアイデア提案コンペ6案（本部+貸会議室、ホテル、レストラン、カフェ、スポーツジム、ドミトリー、庭園他）+資料1.（工業会館建替えコンセプトシート）を含め検討しました。
- ・耐震化と立替等開発パターン案を含め、実現度（デベロッパーの有無と費用）の検討を実施しました。…（資料2）
- ・耐震補強の難しさ検証（高コスト）と民間デベロッパーの提案（賃貸住宅開発）を検討しました。

資料1. 工業会館建替えコンセプトシート

工業会館建て替えコンセプト

工業会館の基本機能

- | | | |
|------------------------------|----------------------|------------|
| 1. 歴史が分かる、感じられる施設 | 外観+記念展示等のギャラリー | (代替施設) |
| 2. 会員がいつでも使える施設(会員と会友である単科会) | 集会場+休憩室+会議室 | (校友会館) |
| 3. 大学と同窓会の連携活動対応施設 | 会議室、サービス施設 | (学内施設活用) |
| 4. 会員サービス機能 | サロン+本部事務所 | (学内教室大学会館) |
| 5. 収益機能のある施設(賃貸機能空間) | テナント(飲食、物販、P) | 新築内施設 |
| | | 新貸事務所+店舗 |



資料2. 耐震補強検討案パターン表

名古屋工業会館耐震化方針検討資料

H30.8.22

	耐震化方針 (目的・目標)	工事概要	機能・用途および条件	対応検討方法・工事費算出 *相談先(k、D、S)	(委員会評価) 評価 (ABC)
1	既存耐震補強 原型を残し機能UP	・構造補強難の為・柱頭免振 ・設備更新 ・ELV新設 ・新規機能追加	・現状機能+アルファ ・事務所、仮事務所 ・駐車場、 *工事期間中学内仮事務所	*関係建設業者に相談 概算費用1~1.2億円? *会員ニーズの展開重要 ・大学・卒業生連携室相談	(B)
2	解体し建て替える (資産として残す)	・自己開発 ・事業代行者・共同事業者	*会員にメリットのある施設 ・工業会本部+会議室+P ・事業用として賃貸住宅 *工事期間中学内仮事務所	*会員ニーズの展開重要 *関係建設業者に相談 ・概算2~3億円・20年後収益 ・学内施設へ借室入居	(A)
3	解体し建て替える (事業用資産とする)	・デベロッパー委託開発 ・将来の収益確保	*会員にメリットのある施設 ・工業会本部+会議室+P ・事業用として賃貸住宅 *工事期間中学内仮事務所	*会員ニーズの展開重要 *関係建設業者に相談 ・概算2~3億円・20年後収益 ・学内施設へ借室入居	(A)
4	大学連携	資産処分	・(大学関連施設)	(収入0、解体費7千万円) *将来対応可能な移転先検討 *学内移転か、学外移転	(C)
		資産連携	*賃貸収入が得られる施設 *賃貸住宅、事務所、店舗 *工業会と大学への収益用途	*大学・卒業生連携室相談 *将来校友会館が工業会館 *当初校友会館へ仮入居	(A)
5	・一時金取得 (第3者へ売却) 事業用資産買替 (資産処分)	<売却> ・現状のまま処分 ・解体し更地として処分	・不動産業者へ売却 ・デベロッパーへ処分	(2~3億円) *将来対応可能な移転先検討 *学内移転か、学外移転	(B)
6	土地の提供免税 その他資産活用 資産を減らず保有 (公益事業者連携)	・社会貢献事業への資産提供 ・公益施設への建て替え ・(既存解体)	*公益用途へ活用 *公益施設 *高齢者施設、防災拠点等	*将来対応可能な移転先検討 *学内移転か、学外移転	(C)

- ・H30年、耐震補強費と住宅開発案の継続検討を総会に掛け、耐震化・建替え検討委員会で開発方法を検討（6回開催）することとなりました。…（資料3）（資料4）

又、長期財政検討からは、今後収入の増加は見込めないことから、新規に投資をし、高額耐震補強工事や建替え工事を実施することが難しく、外部資金の導入が必要なことが指摘されました。

資料3. 検討スケジュール

工業会館耐震改修・建て替え検討基本フロー					H30.10.27
	実施可能な方針検討 開発基本方針検討段階 (H29年度)	開発コンセプト確定 開発方法検討企画設計段階 (H30年度～31年度)	具体的な開発計画検討 基本設計・実施設計段階 (H31年度～32年度)	耐震改修・建替計画の実施 実施(増改築工事)段階 (H32年度～33年度)	
基本工程	開発方針検討 (・耐震改修) (・建て替え)	開発方針決定(可能性・体制整備)	コンベ事業者選定	解体・建設	
	* 都度理事会の方針検討し推進していく				
<開発計画>		* 検討委員会設置検討			
設計	構想段階：* 開発イメージ固め * アイデア募集	企画段階：(規模・用途詰め) * 事業協力者調査	基本・実施設計 (確認申請)	設計監理	
施工	* 工事費概算	* 長期事業計画策定	* 各種手続き * 工事費算定	* 施工業者入札決定	
<資金調達>		* 必要資金の把握	* 資金調達検討	* 自己資金、借入れ、寄付金	
事業組立	* 事業手法検討 概算押さえ	* 調達式の検討 * デベロッパー相談・検討	* 借入、会員寄付募集周知 * デベロッパー選定		
		* 自主開発検討	* 協力企業情報収集		
<隣地連携開発>	* 隣地情報収集把握と交渉 (隣地活用方法検討)	* 隣地・青道買収 (計画への組み込み検討)	* 隣地売買契約・仮使用検討 * 工事中活用か更地化検討	* 計画による活用実施	
<協力企業検討>	* デベロッパー打診 (ダイワH、セキスイH、)	* デベロッパーによる検討 (大東建託、スターツ、セキスイH)	* 開発協力企業選定 (テナントリサーチ)		
<会員周知了承>	総会で取り組み説明 * 実施事項組み込み	重点実施事項組立・経緯説明 * 会員意向確認・意見聴取	(計画説明・資金調達要請) 計画へのフィードバック	(寄付募集と情報提供)	
<大学等関係諸官庁調整>	* 仮事務所可能性打診	* 具体的条件検討	* 開発方針による移転計画	* 具体的仮・本移転	
	一時借用か恒久移転検討				

資料4. 建替え方法検討表

名古屋工業会館耐震化方針検討資料					H30.10.27
	耐震化方針 (目的・目標)	工事概要	機能・用途および条件	対応検討方法・工事費算出 * 相談先 (K、S、D、St)	(支部長評価) 評価
1	既存耐震補強 原型を残し機能UP	・構造補強難の為・柱頭免振 ・設備更新 ・ELV新設 ・新規機能追加	・現状機能+アルファ ・事務所、仮事務所 ・駐車場、 * 工事期間中学内仮事務所	* 相談先 (K、S、D、St) * 関係建設業者に相談 概算費用1.2～2.4億円 * 会員ニーズの展開重要 ・大学・卒業生連携室相談	—
2	解体し建て替える (資産として残す)	・自己開発 ・事業代行者・共同事業者	* 会員にメリットのある施設 ・工業会本部+会議室+P ・事業用として賃貸住宅 * 工事期間中学内仮事務所	* 会員ニーズの展開重要 * 関係建設業者に相談 ・概算2～5億円・20年後収益 ・学内施設へ借入居	△
3	解体し建て替える (事業用資産とする)	・デベロッパー委託開発 ・将来の収益確保	* 会員にメリットのある施設 ・事業用として賃貸住宅 * デベロッパーの条件 * 工業会として事務所移転	* 会員ニーズの展開重要 * 関係建設業者に相談 ・概算(2～5)億円・初年度から収益 ・20から35年後資産移転	△
4	大学連携	資産処分 ・解体し大学へ寄付 ・学内施設へ借入居 資産連携 ・相互資産連携活用 ・収益可能賃貸事業用施設 * 収益事業用資産へ建替え	・(大学関連施設) * 賃貸収入が得られる施設 * 賃貸住宅、事務所、店舗 * 工業会と大学への収益用途	(収入0、解体費2千万円) * 将来対応可能な移転先検討 * 学内移転か、学外移転 * 大学・卒業生連携室相談 * 将来校友会館が工業会館 * 当初校友会館へ仮入居	○
5	・一時金取得 (第3者へ売却) 事業用資産買替 (資産処分)	<売却> ・現状のまま処分 ・解体し更地として処分	・不動産業者へ売却 ・デベロッパーへ処分	(1億円) * 将来対応可能な移転先検討 * 学内移転か、学外移転	○
6	土地の提供免税 その他資産活用 資産を減らさず保有 (公益事業者連携)	・社会貢献事業への資産提供 ・公益施設への建て替え ・(既存解体)	* 公益用途へ活用 * 公益施設 * 高齢者施設、防災拠点等	* 将来対応可能な移転先検討 * 学内移転か、学外移転	—

そして、全国の支部の意向確認の為、全国支部長会議の議題にあげ、会員の意向確認を実施しました。…（資料5）

主な意見は1）同窓会事業として今後の収益増が見込めない状況で、多額の費用をかけ長期回収事業することや耐震補強工事はすべきでない 2）本部を学内に移転し大学との連携強化を図るべし…との意見がほとんどでした。

その結果、建物委員会で、暫定活用案（解体及び跡地活用で有料駐車場案）決定しました。それに伴い大学との連携委員会を立ち上げ、本部の学内移転の具体的協議を行い、全学同窓会との位置づけで、現校友会館2階への入居が決定し、工業会館の工事準備が整いました。…（資料6）

資料5. 支部長会議総括表

名古屋工業会館耐震化方針検討資料 3

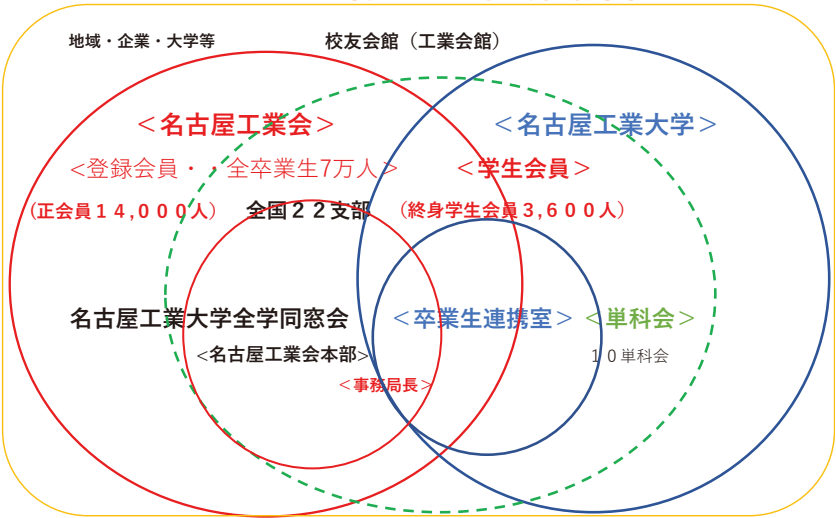
R1.7.6

④	(目的・目標) 耐震化方針	工事概要	評価項目			総合評価 実現性
			開発方針妥当性 (会員オーソライズ)	事業面 (財政負担) (安定経営寄与)	資産保全 (工業会の事業資産)	
1	現状のまま使用 (被害低減策実施)	・ 什器備品家具固定 ・ 災害保険見直し契約 ・ 設備更新実施 ・ 1 階の柱補強	○ ・ 要職員安全確保 * 設備更新必要	○ 大きな財政負担無し	△ * 長期保有は難しい * 建替えの時期が課題	△
2	既存耐震補強 原型を残し機能UP	・ 設備更新 ・ ELV新設	× 技術的経済的に難	× ・ 将来的にも収益なし	△ * 建替えの時期が課題	×
3	解体し建て替える (資産として残す)	・ 自己開発 ・ 事業代行者・協力事業者	○ 将来的安定収入確保 ・ 会員寄与可能施設	(リスク回避条件) △ ・ 当面 5 億円の借金 ・ 長期財政安定寄与	○ * 長期安定資産確保	事業保証あれば ○ △ 長期保証難
	解体し建て替える (事業用資産とする)	・ デベロッパー委託開発 ・ 等価交換事業	△ ・ 協力企業あるが 等価交換企業型	○ ・ リスクなければ可 ・ 資金調達なし	△ * 実質資産一部処分	△ ○
4	大学連携	資産処分	△ △	○ △	× △	△ △
		資産連携	△ ・ 大学との協議次第	○ 将来的安定収入確保	○ ・ 長期資産確保可能	○
5	更地にして活用 (事業用資産とする)	・ 解体し収益事業 貸駐車場他	○ ・ リスクがない	○ 小投資で長期収入確保	○ 土地資産は確保可	◎ 暫定活用
6	・ 一時金取得 (第 3 者へ売却)	< 売却 > ・ 現状のまま処分	△	○	×	△ 住宅デベ

資料6. 工業会館の位置づけ表

これからの名古屋工業会組織図

190402



資料7. 解体工事のマスター工程表

⑧

工業会館耐震改修・新規事業構築検討基本フロー

R2年1月28日

実施可能な方針検討 開発基本方針検討段階		開発コンセプト確定 開発方法検討・企画段階		具体的な開発計画検討 (開発準備段階・実施計画段階)		耐震改修・建替計画の実施 事業実施段階	
(H29年度)		(H30年度)		(H31年度) (R元年度)		(R2年度～3年度)	
基本工程	開発方針検討	開発方針決定(可能性・体制整備)		(社団法人基本財産移転完了)		(長期財政体制移行)	
	(・耐震改修)			準備段階・事業者選定			
	(・建て替え)					解体・工事・事業開始	
	* 都度理事会方針検討し推進していく * 総会+支部長会議報告承認						
<開発計画>		* 検討委員会設置検討		* 継続検討委員会			
計画	構想段階 * 開発イメージ固め * アイデア募集	企画段階 (規模・用途詰め) * 事業協力者調査		基本・実施 * 各種手続き (社団法人として県への届出他)			
	* 工事費概算	* 長期事業計画策定		* 工事費算定 * 解体工事 * 施工業者入札決定 * 新規事業実施			
<資金調達>		* 必要資金の把握		* 資金調達検討		* 自己資金	
事業組立	* 事業手法検討	* 調達方式の検討		* 長期財政計画の見直し			
	概算押さえ	* デベロッパー相談・検討		* 協力業者選定(暫定事業)		暫定利用検討	事業実施
		* 自主開発検討		* 協力企業情報収集			
<隣地連携開発>		* 隣地情報収集把握と交渉 (隣地活用方法検討)		* 隣地+青道買収 (計画への組み込み検討)		* 青道買取交渉・契約・仮使用権 * 計画による活用実施 * 更地化検討	
<協力企業検討>		* デベロッパー打診 (ダイワH、セキスイH、)		* デベロッパーによる検討 (大東建託、スターツ、セキスイH)		* 開発協力企業選定整理 (共同事業者リサーチ) 協力業者選定	
<会員周知了承>		総会で取り組み説明 * 実施事項組み込み		重点実施事項組込・経緯説明 * 会員意向確認・意見聴取		* 総会承認(計画・資金調達説明) * 全支部へ計画へのFBと了承	
<大学等関係諸官庁調整>		* 仮事務所可能性打診 一時借用か恒久移転検討		* 学内移転の可能性確認 * 具体的条件検討		* (学内)移転準備 * 学内移転 * 本部整備(看板等) * 開発方針による移転計画	
会館・工業会事務所		* 耐震診断確認、対策検討 * 暫定利用も検討 * 移転先の検討		* 学内移転先交渉 * 事務所移転準備 * テナント転出通達周知、転出交渉、転出		* 事務所移転 * 解体・更地化・暫定活用 * 新体制への移行	

- ・ H31・R1年総会で解体、暫定活用（有料駐車場）方針決定し、建物委員会で、具体的な解体工事及び暫定利用方法の検討を行いました。

又、貸駐車場・テナント転出協議も具体化し、契約解除及び、転出実施と同時に本部移転の準備に入り、什器備品等の整理や引っ越しの準備をし、年末に校友会館へ本部移転実施しました。

- ・ R2年解体工事推進の為、大学施設企画課から工事担当者の派遣を依頼発注及び監理体制を整備し、解体工事の発注準備に入りました。
 - ・ 工業会館解体に当たり、アスベストやPCB等特別管理物質の有無の調査を行い発注の準備を行いました。そして工事発注の手続きに入り、解体工事発注書の作成と、業者候補企業へ工法提示と見積を依頼、入札の結果、業者（鴻池組）選定し、解体工事の体制が整いました。解体工事に先立ち、住民説明や・安全祈願祭を実施、そして環境法関係の諸手続きを行い解体工事に着手しました。
- 解体工事实施…（資料7）

- ・ 解体工事推進に当たり、毎週金曜日に工業会（内藤常務理事・三田事務局長）と大学施設企画課出向者（東川主幹）と鴻池組（和田所長）とで工程会議を開き、進捗状況確認、課題検討、対応と予定確認をしながら塔屋解体に始まり4階から1階まで重機3台（小、中、大型）にて慎重に解体し、そして基礎までの解体を近隣へ対応しながら予定通り無災害で実施しました。また平行して、解体後の駐車場経営委託先の選定を3社に依頼、選定（名工大OBと関係のあるスターツ）し契約し有効活用の体制を整備しました。

- ・ R3年2月解体完了し、資産活用（将来開発の暫定活用）として3月から有料駐車場事業をスタートしました。

以上報告とします。

名古屋工業会館 解体の様子



安全祈願祭（10月31日）



重機を屋上へ（12月16日）



屋上ペントハウス解体（12月16日）



4階の解体開始（12月16日）



4階解体進行（12月17日）



4階解体終了（12月21日）



3階解体開始（12月23日）



3階解体終了（12月24日）



2階解体開始（12月24日）



2階解体終了（12月27日）



建物解体終了（1月15日）



基礎撤去（1月17日）

名古屋工業会の役割と課題

(一社)名古屋工業会 相談役 藤原 俊朗 (K31)

1. はじめに

名古屋工業会は加川理事長始め現在及びこれまでの役員・会員の方々のご努力と、大学の歴代の学長始め教職員のご指導により立派な運営をされており、深く敬意を表しています。「ごきそ」500号発刊にあたり私の理事長時代を振り返り、工業会の今後の役割と課題を考察致します。

2. 理事長時代の思い出

平成10年6月、32回総会において理事長に指名され4年間務めました。主として取り組んだ活動や事業は下記のとおりです。

- 1) 大学と事業企画と実行の連携 当時の運営委員会に大学側も委員に
- 2) 会員増強 21世紀の知的ネットワークづくりをスローガンに
- 3) 支部活動の活性化 支部と本部の連携交流強化
- 4) 産学連携支援 研究協力会の設立

当時大学では、大学の法人化、再編統合、教育改革等環境変化の大きな時期でしたが、工業会の課題にも熱心に取り組んでいただけました。特に松井先生(当時副学長)には極めて適切なご指導を賜り、今日あるのも松井先生のお陰と思っています。

工業会館が取り壊しになりますが、円卓座席で役員の方の活発な議論、鶴舞公園の四季の移り変わりを味わい、心を豊かにしてくれた事、佐野さん始め事務局の女性の方々の熱心な執務ぶりは忘れることはできません。

3. 大学を取り巻く今後の課題

大学は法人化により自己責任において判断をされるようになり、社会や企業との接触する表面積も増加して学問の在り方や社会への対応に使命感を持ってきたと考えます。一方大学の国際化・国際競争力の強化、科学技術の進展に伴う新しい能力の要求、又人口の減少・進学率の低下等々対応する課題も増加してきます。

- 1) 連携・統合・規模の適正化(例えば大学連携推進法人)
- 2) 科学技術とイノベーション推進(名工大として)、新技術の育成
- 3) 大学の経営基盤・財政基盤強化、研究資金、大学基金
- 4) 地域社会・産業の活性化更なる貢献

4. 名古屋工業会の役割と課題

大学の支援と会員相互の親睦を目的とする名古屋工業会は、今後の大学の進歩や発展・環境の変化に對してどう取り組むべきか、極めて困難な課題を予測します。

- 1) 産学連携、共同研究促進について工業会として大学と組織的対応
- 2) 諸外国の同窓会が行う大学への寄付行為とその基盤について学ぶ
- 3) 同窓の交流親睦のみならず、相互に価値の発見と創出を
- 4) 人として組織として、依存ではなく自立を旨とする社会風潮の中で、工業会の将来の事業理念・構造の調査研究

最後になりましたが、名古屋工業大学と名古屋工業会の今後の益々のご発展と会員の皆様のご健康とご繁栄を祈願致します。

名古屋工業会への思い

(一社)名古屋工業会 相談役 牛込 進 (Y33)

名古屋工業会機関紙「ごきそ」が今年3、4月号をもって500号になるとのこと、歴史の厚みを感じ喜ばしいことであります。

折しも、名古屋工業会館の解体工事が進行しており、年度末には工事が完了するとのこと、寂寥の感はありませんが、変化の中での節目の時であることを考えれば致し方ありません。

私は名古屋工業会の運営に長年携わっておりましたので、同会に対する思いは深いものがあります。

初期の頃は、総会も新年会も同会館で開催しておりました。新年会は20～30人の出席で、とても今とは比べものにならない小規模のものでした。中日ビルで開催するようになり、一段と華やかになりました。

いろいろな面で改善されましたが、一番大きなことは、入学時に新入生に名古屋工業会員になってもらったことです。これは大学当局と名古屋工業会役員の皆様のご尽力によるものと深い敬意の念を持っています。

僭越ながらこの機会に、名古屋工業会の運営について、私見を3つ申し上げます。

1つ目は、以前、総会に諮問したことがあります。名称を「ごきそ」に変更してはいかがでしょうか。名古屋工業会と耳にしますと、名古屋市の関連機関と誤解されかねません。「ごきそ」は機関紙名に使われており、また、「御器所が丘」の地名でもあります。私は「御器所」は縁起のよい名前だと思います。再度検討していただければ幸いに存じます。

2つ目は、これも理事会でお話したことがあります。アメリカでは同窓会を非常に大切にしています。私が修了しましたコロンビア大学大学院では卒業後もお互いに連絡を取り合っており、就職先等卒業後の状況を会誌に掲載しております。また、昇進の都度報告をしております。卒業生同士の連携は日本と比べものになりません。

アメリカのような人種のるつぼの国では同じ学び舎で学んだ者同士は、家族のような関係で繋がっています。同窓生を大切に、お互い便宜を図っています。

私は名古屋工業会もそのようであってよいのではないかと考えています。それが会員としての大きなメリットにもなります。

3つ目は、卒業生から寄付を募ることです。国立大学は独立法人になり、毎年運営管理費を削られています。先生方の研究のサポートや大学の運営に、我々卒業生も支援したいものです。

私が理事長の時に、創学100周年を迎え、学長と一緒に寄付を集めさせていただきました。国立大学の学生は学生時代、国にお世話になっているにもかかわらず、寄付することに前向きでないことに驚いたものです。皆様には今後も思い切った寄付をお願いしたいと思います。それが、名古屋工業大学の地位の向上にもつながると思います。



(思い出の写真①) 名古屋工業大学100周年記念式典
終了後の祝賀会で、松井学長(左から3人目)と
於：ウェスティンナゴヤキャッスル



(思い出の写真②) 名古屋工業会
新年会で柳田学長(右) 山田教授と

名古屋工業会との関わり

(一社)名古屋工業会 相談役 二杓 幸夫 (K39)

今にして思えば大変心苦しい限りではあるが、私と名古屋工業会との関わりは、人生も半ばをとうに過ぎ、サラリーマン生活が終盤に近付いた頃だった。折しも100周年記念事業に向けた寄付金集めのさなかであったが、産業界の財布の紐も固く、目標額達成に向け、単科会ごとに設定された目標達成率の報告に一喜一憂したことが思い出される。

国立大学法人として大学自体が寄付金集めの主体となるということから、名古屋工業会に求められる役割についても拡がりをもたらされた。会員相互の親睦や単なる資金源としての役割にとどまらず、豊富な経験を有する卒業生の人材活用に目が向くに至った。こうした背景でスタートしたのが「職業指導」(第二部)への講師(実務型教員)派遣であった。さらにOBトップセミナーの定例化で、社会にはばたこうとする学生諸君の進路選択の一助となることが期待されたが、果たして効果を発揮しているのだろうか…?

続いて起こった大きな変化は、昭和42年(1967年)以来続けてきた「公益社団法人」という看板が「一般社団法人」に変わったことである。平成20年(2008年)に施行された公益法人制度改革関連三法によるものであるが、その背景として「国立」名古屋工業大学が「国立大学法人」名古屋工業大学へと変わったことと根っここのところは同じであろう。制限はありつつも、大学自体が「法人」として、資金確保に乗り出す自由度が与えられたことから、卒業生で構成される「同窓会」に対してはその公益性が認められなくなったのである。即ち、寄付金集めの受け皿としての役割はなくなったのである。こうして、構成員(社員)の会費による共益型「一般社団法人」としての道が選択されたわけである。かくなるうえは、各地に拡がる同窓生のネットワークを活かし、その広範な知識と経験が共有され、会員相互の研鑽、さらには後輩の進路指導や研究に活かされることが期待される。元公益社団法人としての足枷が外れた暁には、こうした会員諸氏の知見を活かした収益活動が生まれることを熱望する。



平地になった工業会館

(一社)名古屋工業会 副理事長 山下 啓司 (W56)

名工大で職を頂いて既に40年、しかしながら竜ヶ池の畔にある少し風変わりな建物が、工業会の建物であることはついぞ知らなかった。そんな中、平成19年から本学キャリアサポートオフィスを任せて頂くようになり、その中で、工業会とのコラボレーション企画「Topセミナー」において、各界で活躍なさっているOB諸氏をお迎えして、在学生たちに「君らの先輩がこのように産業界を引っ張っていらっしゃるんだ」と知らしめる企画に少し関わらせていただき始めた。

そんな打ち合わせに加えて頂くのに初めて工業会館にお邪魔した。外も風変りだが、中の構造も未だ結局どうなっていたのか???である。その流れで、キャリアサポートオフィスが企画した学内で普段学生が食べられないようなケータリングの料理を摘みながら、各業界のTop企業のOBさんたちに集まってもらい、就活生たちと懇談する会「ディナートーク」を主催して頂いた。

今までは同窓会では、OBさんが個人資格で参画されていたために、中々就活支援に結びつけることが難しかったのだが、こういう流れの中で、いろんな形で工業会と現役学生の就活支援を結びつけることが可能となり、色んな企画を工業会館で練るようになってきた。一昨年から山下も副理事長として工業会の中に入れてもらい、さらなる学生支援に関わっていきたいと考えている中、平地になった工業会館跡を見ながら、コロナ禍を契機に代わっていくこれからを想像している。

御器所の思い出

(一社)名古屋工業会 副理事長・東京支部長 松浦 明人 (M47)

先日のNHK大河ドラマ「麒麟がくる」で、太閤秀吉の実母の「仲」の生まれが「御器所村」だったとありました。今の御器所町は大学の所在地であり、私の4年間の下宿先の住所でもありました。52年前広島県の福山から出てきた私は、下宿探しに大学の周りの御器所のお屋敷町を歩いていて、この辺りに住みたいと思い、石垣の上の門のベルを押しました。その家の方も良い方で、近所の大きな家を紹介してくれました。紹介の家に伺うと、上品なおばあさんが出てこられ、下宿屋ではないが名工大の学生なら縁もあり、泊めてあげると言われました。そのおばあさんは名工大の繊維工学科の教授の奥様で息子さん夫婦と3人暮らしでした。確か部屋数は8～9部屋くらいあったと思います。2階の4部屋は全部空いていて、その一つに4年間住まわせてもらいました。築さんというその家を数年前に尋ねましたが、石垣の上の大きなあの屋敷はなく、更地になっていました。その数年前でしたか、年賀状が届かなくなっていました。お世話になった方々も多く亡くなりましたが、名古屋は遠い田舎からの私にも優しく、本当に良い思い出ばかりでした。

名古屋工業会館と中島一先輩の思い出

(一社)名古屋工業会 副理事長・大阪支部長 岡崎 格郎 (A46)

会員の募金で昭和52年(1977)に建てられた名古屋工業会館(名古屋工業大学全学同窓会の活動拠点、以後、会館と略称)が解体され、活動拠点が母校内へ移りました。

私は、昭和42年(1967)から昭和48年(1973)母校で学び、その後大津に住んでいます。会館に初めて入ったのは、平成24年(2012)名古屋工業会(以後、工業会と略称)の大阪支部副支部長の時です。平成28年(2016)大阪支部長、翌年工業会の副理事長になり、2～4回/年、会館を利用するようになりました。

会館は、龍ヶ池に面して建ち、瀟洒なレンガ調のタイル張りで、3階の会議室へは玄関ホールの吹き抜けを回り階段で2階へ、そして空中階段を上ると大会議室でした。

会館は、建築学科卒のOBのコンペを経て、A22の中島一先輩が、設計されました。中島先輩は、昭和38年(1963)～昭和43年(1968)母校の建築学科助教授を経て、当時は愛知工業大学の建築学科教授でした。平成5年(1993)～平成17年(2005)彦根市長を勤められ、工業会や建築学科のOB会・光鯨会へも理事として積極的に参加・支援されました。

会館の他、愛知工業大学図書館、彦根市消防本部、甲賀総合病院など、数多くの設計を手掛けられています。現在、彦根の観光名所になっている「夢京橋キャッスルロード」は、昭和61年(1985)～平成11年(1999)に作られました。

会館での一番の思い出は、令和元年(2019)10月26日に行われた昭和44年卒業生の「半世紀遅れの卒業式」の準備をここで行ったことです。母校及び工業会が事務局となり、各学科から代表の方と打合せを重ね、卒業生625名中160名参加と盛大な会になりました。

私は、工業会・光鯨会ともあまり縁が有りませんでした。しかし、平成19年(2007)光鯨会関西支部の副支部長に選出された支部総会が彦根であり、会場の設営などで中島先輩に大変お世話になりました。中島先輩にはその後、工業会・光鯨会のイベントで良くお目にかかり、母校に対する熱い思いを良く聞いたものです。しかし、会館設計にあたっての思いなどは聞かなかったのが、残念です。

今後、工業会本部の活動拠点は、母校の構内にある校友会館(講堂の南側にある旧、三協会館)となります。新型コロナ感染対策として、生活も大きく変わりました。新しい活動拠点で、工業会の活動のやり方も大きく変わりますので、ご期待ください。